

ポーカーで証明した 正しい意思決定

知識ゼロからメジャー大会優勝の軌跡

著者 マリア・コニコヴァ

訳者 フジタカシ

The Biggest Bluff

How I Learned to Pay Attention,

Master Myself, and Win

by Maria Konnikova

ウォルター・ミシェルを偲んで。
あなたに約束した論文発表はまだ先だけれど、
まずはこの本を出すことができました。
自分がコントロールできることと
できないことを理解する明晰さが
私たちに常にあらんことを。

そして何があっても
そこにいてくれる、
私の家族へ。

Пусть все будут здоровы.

The Biggest Bluff

Copyright © 2020 by Maria Konnikova
Japanese translation rights arranged with Maria Konnikova
c/o Elyse Cheney Literary Associates LLC (d/b/a The Cheney Agency), New York,
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

「人生の唯一の教訓——
人がそれを受け入れて
正気でいられるよりも多くの事故が
その生涯では起きるものだ」
トーマス・ピンチョン『V.』
ファウスト・メイストラルの言

「諸君に幸運を祈る。なぜならこの先、
準備万端な者にもそうでない者にも等しく
楽な仕事などなく、諸君には幸運が必要なことから。
それでも諸君は上手くやっていけると
私は信じている」
ヨシフ・ブロツキー『Speech at the Stadium』
(スタジアムでのスピーチ)

「でも、ときどき奇妙なことが起こり、
ときどき夢が叶い、
そして生活パターンが一変し、
ときどき月が青く光る」
W・H・オーデン『ポール・バニヤン』の台本

【目次】

プレリユード／2017年7月、ラスベガス	4
アンティアップ／2016年晩夏、ニューヨーク	9
ギャンブラーの誕生／2016年秋、ボストン	38
負けの美学／2016年秋、ニューヨーク	52
戦略家の思考／2016年晩秋、ニューヨーク	73
男の世界／2016年冬、ニューヨーク	102
バッドビートなどない／2017年冬、ラスベガス	125
数百万通りから／2017年冬、ラスベガス	146
物語のビジネス／2017年3月、ラスベガス	164
ギャンブラーとオタク／2017年4月、モンテカルロ	181
テルの全て／2017年5月、ニューヨーク	205
自分を読む／2017年5-6月、ニューヨーク	221
フルティルト／2017年6-7月、ラスベガス	239
栄光の日々／2018年1月、バハマ	283
ギャンブルの野獣の心／2018年3月、マカオ	306
ゲームの誤謬／2019年6月、ラスベガス	338
謝 辞	346
用語集	349

プレリユード

2017年7月、ラスベガス

その部屋は人で溢れ返っている。

俯いた頭に思慮深げな顔。その大半がサングラスや帽子、フード、巨大なヘッドホンに隠れてよく見えない。どこまでが人の体で、どこからがポーカーテーブルの緑のマットかを見分けるのも一苦労だ。

何千という数の身体が、70年代ダイニングルームの製品カタログから出てきたような椅子——オレンジとからし色の格子模様の張り生地、金色の脚にはほぼ正方形のフレーム——に、落ち着かない様子で座っている。天井の鉄格子から吊るされたけばけばしいネオンライトのおかげで、そこは明るさを出そうと少し張り切りすぎた病院の趣を醸し出している。

全てが少し使い古され、少し時代遅れで、少し痛んでいる。

その部屋の目的地にたどり着く手掛かりは、天井からぶら下がっている色分けされた数字だけ。オレンジのグループに黄色のグループ、そして白のグループ。それぞれのプラカードには数字と、その下に、1枚のポーカーチップが描かれている。

部屋を満たすのはカジノ独特のむっとする空気。それは古いカーペット、粉、甘ったるくて少しきつい香水。冷めた揚げ物に気の抜けたビール。そして朝から同じ場所に居合わせている数千の疲れ切った肉体から発せられる、他と紛うことなき鼻を突く金属臭。

五感が刺激されている最中、何かがおかしいと感じるが、すぐにそれを特定するのは難しい。そしてやがて気づく、不自然な静けさに。

これが実際のパーティだったなら、無数の声や、椅子を引きずる音、足音の反響の騒々しさがつきものだ。しかしそこにあるのは神経質なエネルギーだけ。その緊張感は、匂いや音、味として伝わり、そして否が応でも自分の胃に巢を張るのを感じさせる。部屋に残る音はただ1つ。夏蟬の求愛儀式での大きな鳴き声を思い起こさせる、ポーカーチップの音だ。

今日は、1年で最大のポーカートーナメント、「ワールド・シリーズ・オブ・ポーカー (WSOP)」のメインイベント初日だ。ワールドカップやマスターズ、スーパーボウルに匹敵するイベントだが、それらと違うのは、超一流アスリートでなくても参戦できること。この大会は全ての人に開かれている。きっかり10,000ドルあれば、世界中の誰もが大会に参加して荣誉あるポーカー世界チャンピオンのタイトルと、900万ドルにまで達したことで知られる賞金を目指すことができる。

英国人かオーストラリア人なら、賞金は免税だ。

プロのポーカープレイヤーにとってもアマチュアにとっても、まさにキャリアの頂点。もしこのメインイベントで優勝しようものなら、ポーカー史に名を刻むことが保証される。席に着いた時点で、ポーカー界で最も権威があり高額な賞金への挑戦権が手に入る。この一発勝負のために何年も貯金した人もいるのだ。

1日の終わりが近づいている。

今日のスターティングフライト——あまりに多い希望者を全員受け入れるために、第1回戦はいくつかの「フライト」と呼ばれる組に分割される。夢は高額だが、とてつもなく魅力的なのだ——にエントリーした数千人のうち、もうすでに多くが脱落、ポーカー用語で言うところの「バスト」している。残っている者は何とか2日目に進もうと必死だ。

一日中プレイした挙句、終了間際に手ぶらで退場するのだけは誰もが避けたいに違いない。皆、あの魔法の袋を目指している。それは透明なプラスチック製の神格化されたジップロックで、複数日にまたがるトーナメントで次の日に進める幸運な者が自分のチップをしまうために使う。

名前と出身国、チップ数を外側に大文字で書いてから、本当に機能するのか疑わしい粘着性の紐でそれを封印する。その後、必須事項であるソーシャルメディア向けの写真を撮って、これまた必須事項なチップ数と#WSOPのハッシュタグを添えて投稿する。そして疲労困憊のまま、名もなきホテルのベッドに倒れ込むのだ。

ただし、この物語はまだ荷造りの段階にまで進んでいない。まだ2時間ある。丸々2時間もだ。2時間でできることは山ほどある。だからこそ、とあるテーブルが周りから際立って見える。

そのテーブルには8人のプレイヤーがしかるべき場所に座り、カードを受け取り、ポーカープレイヤーがやるべきことをやっている。

しかし、真ん中の椅子、シート6が空席のままだ。通常の状態では珍しいことではない。プレイヤーがバストして退場し、代わりの新しいプレイヤーが到着するまで、そこは空席になるからだ。ただしこのケースでは、バストでの退場は発生していない。

その空いた席の前にある緑のフェルトの上には、色分けされたチップの山が、額面の高いものから順に左から右へと綺麗に並べられていた。そしてハンドがディーラーされる度に、ディーラーが手を伸ばしてそこから貴重なアンティ——全てのプレイヤーが自分のカードを見るために支払わなければならない強制徴収額——を奪っていく。そして2枚のカードを、捨てカードの置き場であるマックと呼ばれる場所に無造作に投げる。そこにプレイヤーがいないからだ。

1 ラウンド毎に、丁寧に積み重ねられたチップは少しずつ低くなっ

ていく。しかしそこは空席のまま。世界で最も権威あるポーカーイベントに参加するためにお金を払ってなお姿を現さないとは、一体どんなアホだろうか？ メインイベントの真っ最中にみすみす自分を「ブラインドダウン（ハンドをプレイせずに、参加費だけで自分のチップをすり減らすこと）」させるとはどれほど間抜けなのだろうか？

その天才は、残念ながら、本書の著者である。

テーブルの他のプレイヤーたちが私の運命をあれやこれやと推測している間、私はリオホテル&カジノのトイレの床に胎児の姿勢で蹲っていた。上品な表現が思いつかないが、要は嘔吐していた。

ディナー休憩に、部屋の向かいにあったメキシコ料理屋でダメだと分かっているがらつい食べてしまったワカモレが当たったのだろうか？ 体がストレスに反応した？ 流行外れのウイルス性胃腸炎？ 分からない。でも私は、偏頭痛に狙いを定めていた。

準備に準備を重ねてきた。あらゆる不慮の事故に備えて。もちろん偏頭痛も。長いこと偏頭痛に悩まされている私に、偶然に身を任せる選択肢はなかった。予防の鎮痛剤を飲んだ。朝はリラックスするためにヨガをした。瞑想もした。睡眠はたっぷり9時間とった。そして、自分の全神経があらゆる食物を避けたいといっているのを押しきり、ディナーブレイクでちゃんと食事を取った。

その結果がこれだ。

これが人生だ。自分がやれることをどんなにやったとしても、どうしても自分にはコントロールできないことがある。酷い不運は計算不能だ。ことわざの通り、『人は計画し、神は笑う』のだ。今の私ならどんな小さな笑い声も察知してしまう自信がある。

そもそも私がポーカーの世界に足を踏み入れたのは、スキルと運の間にある境界線を見極め、自分でコントロールできること・できない

ことを学ぶためだ。そして今、響きの良い教訓（そんなものがあればだが）に向き合っている——運にブラフは通じない。

私が床に倒れている理由などポーカーは気に留めない。「でもメインイベントなの！」と泣きながら不平を訴えかける相手はいない。「なぜ」はどうでもよかったのだ。緊張だろうがストレスだろうが、偏頭痛だろうが食中毒だろうが、カードは配り続けられる。

メッセージは明確だった。

どんなに入念に計画したとしても、それがX要素に台無しにされることはままあるのだ。結果はなるようにしかならない。私にできるのは、自分でコントロールできることにベストを尽くすだけ。それ以外は、まあ、私が決めることじゃない。

いっその場で死ぬのと、何とか力を振り絞って誰かを買収し、残りわずかなチップを袋に詰めさせるのを天秤に掛けながら、「死ぬならせめて、ベタつきと臭いがマシな場所で…」と考えトイレの個室から這い出ようとした。その矢先、携帯のテキストメッセージを知らせるアラート音が聞こえた。私のコーチ、エリック・サイデルからだ。

「調子はどう？」

さもありなん。我が生徒の人生最大の挑戦が順調かを知りたいのだ。天のくすくす声が明らかに大きくなってきた。私は、残された意思の力をかき集めて返信した。

「まずまず。チップは平均より少し下です」

自分が知る限りは本当だ。

「持ちこたえています」

わずかに正しくはないが。うん、私はいつでも楽観主義だ。

「了解。幸運を」との返信。

ああエリック、いま私にはまさにそれが必要なの……。

昔ながらの幸運を、たっぷりと……。

アンティアップ

2016年晩夏、ニューヨーク

「高コストで数々のリスクが伴うにもかかわらず、人生においての教育で、ギャンブルのテーブルに敵う場はない。ポーカーテーブルがその筆頭である」
——クレメンツ・フランス『The Gambling Impulse
(ザ・ギャンブル・インパルス)』(1902)

店の反対側から、エリック・サイデルのトレードマークであるベースボールキャップが隣の長椅子に置かれているのが見える。それが彼のトレードマークだと知っているのは、私が彼をずっと調べていたからだ。

私は彼の特徴（少なくともそう見えるもの）を外野からリスト化していた。彼は注目を浴びるのが好きなトッププロ達とは一線を画していた。彼らのほとんどがカメラを愛し、観衆を愛し、自分の個性を愛した。その個性が何であれ——激しい気性もあれば、異常なアグレッシブさやテーブルでの絶え間ないおしゃべりもある。

彼は物静かで控えめで、極めて注意深い。そのプレイスタイルは見る者に慎重かつ正確に映る。そして何より、彼は勝者だ。ワールド・シリーズ・オブ・ポーカー（WSOP）の複数ブレスレット保持者にして、ワールド・ポーカー・ツアー（WPT）優勝者であり、その獲得賞金は数千万ドルにも上る。

私は慎重に選んだのだ。そしてようやく今、彼の人生の次の1年間を私と一緒に過ごすお願い、いわばプロポーズをデート初日で行っている。リサーチは徹底的でなければならなかった。

私は久しぶりに緊張している。いや、かなり緊張している。洋服も慎重に選んだ。洗練されているが堅すぎず、真面目だけど真面目すぎない。信用できて頼りがいもあるが、お酒の場では愉快で楽しい人。これは難易度の高い誘惑だ。

待ち合わせは、まるでハリウッド映画にそのままあるようなフレンチカフェ。私は約束の時間よりも早く着いたが、彼はもっと早く来ていた。彼は店の右奥で、その長い手足と190センチメートルの長身には小さすぎるビストロテーブルに手足をたたくで収まっていた。

濃い色のTシャツが、彼の色白で真剣な表情を際立たせている。彼は雑誌を読んでいた。とても喜ばしいことに、それはどうやら『ザ・ニュー Yorker』の8月下旬号——色調を抑えたサンペの海の風景画が表紙の——であった。ニュー Yorker誌を読んでいるポーカープレイヤーこそ、私が探していたポーカープレイヤーだ。

私は用心深く、猟犬が匂いを嗅ぐように、視野に入った獲物が怯えて逃げないように、テーブルに近づいた。

エリック・サイデルこそは世界一控えめなポーカーチャンピオンである。ポーカーの栄誉の数もそうだが、その活躍期間が他のプレイヤーを大きく引き離している。彼はキャリアをスタートさせた80年代後半からずっと、ナンバーワンを争う位置にいる。それは並大抵のことではない。ポーカーはこの30年間で大きく様変わりしているのだから。

現代生活のあらゆる局面と同様、ポーカーの質的要素は量的要素に取って代わられた。“計測”が直感を凌駕し、“統計”が観察を凌駕した。ゲーム理論は「フィーリング」の側面を追いやった。

この傾向は心理学の分野にも及んでいた——社会心理学が神経科学に——そして音楽でも、アルゴリズムや専門家が、人が何を聴いているかを分析するだけでなく、曲が最大多数向けのポップとしてどのように構成されるべきかまで秒単位で定量化するようになった。

ポーカーでも同様だ。テーブルにはカリフォルニア工科大学の博士号持ちがウヨウヨいる。そこら中で統計数値を印刷したものを見かけるようになった。会話が始まったと思えばすぐにGTO（ゲーム最適化理論）や+EV（+期待値）の話になる。頻度についての会話がフィーリングについての会話を打ち消してしまう。

しかし、数学的データよりも人間的要素をベースにした心理学的なアプローチという彼のプレイスタイルが時代に取り残されるとの大方の予想に反して、エリックはトップに君臨し続けている。誇張やテストステロンと虚栄に満ち、エゴが中心のプロポーカー界の中で、エリックの異質さはその謙遜的な姿勢にとどまらない。

ポーカープロであると同時に、彼はブルックリン音楽アカデミーの会員であり、飛行機で米国横断してスタンダップコメディを観に行くほどのデイヴ・シャペル好きであり、ロサンゼルスからマニラに至るまでの最新のレストラン事情に辞書レベルで精通している。

彼はラスベガスよりニューヨークを好む。ベガスの住居に加えて、生まれ育ったマンハッタンのアッパーウエスト地区に仮住まいを持っているプロは間違いなく彼1人なはずだ。その旺盛な好奇心はあらゆることに及び、人生への情熱は彼の周囲にまであまねく伝播している。

「アンガスとジュリアは知ってるかい？」

出合い頭に、彼は質問してきた。

誰？ 私には何のジャンルの人名なのかさえ、さっぱり分からない。聞いたこともない作家。知らないともまづい俳優？ エリックが、私が知ってるべきと思っているニュー Yorkerの誰か？

正解は、ミュージシャンだった。私への興味が消え去って、「洗練さ試験」で不合格になっていないとよいが……。

緊張が最高潮に達している。

「彼らは本当に格別なんだ。オーストラリア出身の兄妹デュオで、何度も演奏を聞いたことがある」。“格別”はそれからよく聞くことに

なるフレーズだ。

バービッグス（編註 米国のコメディアン夫婦。Mike Birbiglia, Jen Stein）：格別。「オセロ」の新しい舞台：格別。ベガスへの初旅行で一緒に行った、街外れにある風変わりな小さな寿司バー：格別。LuckyChewy という名のプロポーカープレイヤー：格別。

彼は私はより四半世紀年上だが、話していると新たな経験を楽しむ感覚を忘れてしまった自分に気づかされる。億劫になったし、気力がわかない。92Y（マンハッタンのカルチャー発信地）で最新の講演を聞いたり、JOE's PUBでカナダの抽象劇を観たりするよりは、家でまったりしていたい（どちらもエリックに連れて行かれるが、毎回彼が正しいことが分かる）。

この数カ月後には、私のプレイリストは彼のオススメでいっぱいになっているし、スタンダップコメディの好みも、ネットフリックスのオススメ一覧も、絶対に実現しない「絶対に観るべき」演劇リストも、同様だ。彼なら1人で『ニュー Yorker』誌の「街の最新事情」コーナーを切り盛りできる。

私にとっての理想的な夕方の過ごし方。家でご飯、何杯かのワイン、何杯かの紅茶、ベッドで本か映画。

彼の返事。君は世界最高の街、ニューヨークシティにいるんだぞ！なんてもったいない。

彼はポーカーに対しても、同じ情熱と絶えることのない旺盛な好奇心で臨む。新進気鋭のプレイヤーをフォローするのも大好きで、最新のアプリやプログラムに詳しい彼が、何かを学び尽くしたと思うことは決してない。彼は安定を拒む。

もし私が彼のモットーを表現するとしたら、“人生は自己満足するには短かすぎる”だ。

実際に彼が最も頻繁に受けている質問「野心あるポーカープレイヤーに、何か1つアドバイスするとしたら？」を仕方なくすると、短い

答えが返ってくる。

『注意を払いなさい』

それは、普段私たちが完全に忘れ去っているシンプルな言葉だ。人生に決して楽な道などないのだ。

私がエリックを最初に知ったのは、ポーカーを始めたばかりの他のほとんどの人と一緒だろう。1998年の映画『ラウンダーズ』の中でだ。いろんな意味で、『ラウンダーズ』はポーカーを大衆化した。映画の主人公である頭脳明晰なロースクールの学生（マット・デイモン）が、ポーカーで生計を立て始め、しまいには法曹の道を捨てフルタイムでプレイするようになる物語だ。

そして映画のワンシーンで流れ、その後も何度も何度も分析される、デイモン演じる主人公を最も魅了した戦いこそが、1988年のWSOPファイナルテーブルでのエリック・サイデルとジョニー・チャンのショーダウンだ。「ジョニー・ファッキン・チャン」、「マスター」。コメンテーターたちが何度も復唱する。そしてエリック・サイデルは——「青年は何が起こったのか分からないようだ」

ポーカーの外の世界で最も有名なポーカーの試合。エリックのクイーン2枚がチャンのストレートに陥落——達人の罠が無知な生贄に襲いかかったのだ。

チャンはすでに世界チャンピオンとして君臨していた一方、サイデルにとってはこれが初めてのメジャートーナメント。彼は他の165人を相手に、ここまで勝ち進んできた。ファイナルテーブルに、そしてあと1人で優勝というところまで。信じられない偉業であり、信じられないキャリアの幕開けでもあった。

映画は大学生の間で大流行した。90年代末に公開され、2000年代にはあらゆる若者が、ポーカーの腕前で生計を立てる学生生活を思い描いていた。当時の私はポーカーに見向きもしなかった。ストレートが何か、チャンがなぜそれでサイデルを「罠にはめた」のか、というよ

りも全てが分からなかった。それは学ぶ興味がまったくわからない外国語のようだった。

しかしそれから数年後にやっと映画を観たとき、マット・デイモンがサイデルとチャンの対決を振り返ったときのセリフにビビッときた。

「カードで勝負していたんじゃない。人間と勝負していたんだ」

確かに月並みなセリフだ。しかしそれは私の興味の核心であり、この世界について私が考えていた事柄を見事にとらえていた。心理学、自己管理、自分のストレートを最後までチェックしようとする意思。

チャンがそうしたように——考え得る最高のハンドを持っているながら、それを見事に隠し通し、相手に自分が勝っていると思わせるよう——罫を仕掛けたのだ。実際は始めから負けていたのに。ストレートとは何かを知らずとも、その醍醐味と戦略美は理解できた。

そして今、目の前には当の本人がいる。青年からマスターになった、ポーカー界の歩くレジェンド。そんな彼に私は、1年間の弟子入りを懇願しようとしている。これまで彼が弟子入りを認めたことは知る限り1度もなく、ましてや私自身が人生で1度もポーカーをプレイしたことがないにもかかわらず。私の願いはエリックに師事して、ポーカーの最高峰の大会であるWSOPのための稽古をつけてもらうこと。それははるか昔に、彼が知らずしてポーカーのレジェンドにのし上がった、あの大会である。

その冒険を通して、私は可能な限り最高の判断を下す術を身に付けたいと思った。それもカードテーブルの上だけでなく、世界で通用する術を。私はポーカーを通して、運を手懐けたいと思ったのだ。たとえデッキが自分に不利でもそれを少しでも有利にする術を。

1年間のはずだった。きっちり、思い通りに、要領よく。私には計画があった。エリックにアプローチし、チームを組んで、私がWSOPのメインイベントで戦い、そして見事生還するのだ。

時間制限を設ける作戦は上手くいった。1年は区切りが付けやすい。

有限は乗りやすい。人は何かを1年間やることを容易に想像できるからだ。これをやる1年、あれをやる1年、明確な期限が設けられた新しい役割に挑戦する1年。

誰が私の、ゴールが曖昧な3年半計画を聞きたいだろうか。そんな時間の概念を持っている人などいるだろうか。1年ならば扱いやすく、整理しやすい。1年は無秩序な人生の解毒剤である。

しかし人生には、他の考えがあったようだ。計画は変更を余儀なくされた。骨組みは消え去り、予想外の何かに置き換えられた。まさに人は計画し、神は笑う、だ。

神についてどう考えようと、私は偶然性を信じる。私たちのことも、私たちの計画も、欲求も、動機も、行動も、全く考慮してくれない宇宙のノイズを、私は信じている。何をやるか、そして何をやらないかの私たちの選択に関係なくそこにあるノイズ。分散。偶然。どんなに頑張ってもコントロール不能なもの。でも、頑張ることは本当にいけないことだろうか？

自分の人生や判断における、運とコントロールにおけるバランスのせめぎ合いは、私が何年も取り組んでいるテーマだ。

子供時代が、人生で一番幸運だったかもしれない。両親がソ連を離れると決めたおかげで私には、残っていたら決して目にする事になかった、可能性に満ちた世界が開かれた。十代の頃は、学業で優秀な成績を修め、家系で米国の大学に入学する最初の世代の一員となるために、能力の全てを投下した。

大人になった私は、今の状態がどれだけ自分の行動に起因していて、逆にどれだけ運に左右されていたのかを厳密に解明したいと思うようになった。多くの先人がそうしたように、私も人生においてどれだけ自分のせいで、どれだけ単なる馬鹿げた運なのかを知りたいと思ったのだ。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは著書『決算のとき』（紀伊國屋書店）で自身の生について「ある特定の精子がある特定の卵子に着床し、つまりその前に両親が出会い、その前にそれぞれが出生し、さらにはその先祖全ての出生を掛け合わせると、数億分の1の確率にも満たないであろう」と触れている。それこそが彼女が生を受けるに至った軌跡における運の役割だ。

「そして私が女性として生まれた原因も、現在の科学では全く予測不能な運なのだ。その時から、過去の私のあらゆる行動の一つひとつが、その先にあり得た千種もの将来の芽をつぶしているのではとの思いに捉われるようになった。病気になって学業を断念していたかもしれないし、サルトルに出会っていなかったかもしれない。どんなことも起こり得たのではないか」。偶然と意図を切り分けることなど果たしてできるのだろうか？

それは何よりも哲学的な問いだった。私は自分ができる限りの手を尽くしてそれを追い求めた。大学院に進学しその問いに向き合い、いくつもの研究も行った。私たちはどれほどの頻度で人生をコントロールしているのだろうか。実際には運が支配している状況下で自分はコントロールできているとの誤認が、判断にどのような影響を与えるのだろうか。そして、人は不特定の状況で不完全な情報を与えられたら、どのように反応するのだろうか？

コロンビア大の5年間の博士課程での研究の一環として、私は何千もの人に株式市場のシミュレーションゲームを、時間制限のプレッシャー付きで試してもらった。彼らは一定額を“自腹”で投資しなければならない。そう、本物のお金で。パフォーマンスの良し悪しは、支払い額にすぐさま反映される。その上下幅は1ドルから75ドル以上までと大きい。

投資先は債券または2つの株のいずれかで、それを何百回も繰り返す。債券は安定債で支払いは常にわずか、きっかり1ドルだ。株

は逆に、実際の市場動向に似ていた。儲けははるかに大きい。1ターンで最大10ドルだ。一方、損することもあり、マウスのクリックひとつで儲けた金から10ドルが消えていく。

ゲームの各ラウンドでは2つの株「A」「B」が、ランダムに「良い」か「悪い」に振り分けられた。

良い方を選べば、50%の確率で10ドルが得られ、25%が何も得られず、25%が10ドルを失った。悪いを選ぶと勝率は25%に下がる一方で負ける確率が50%にまで跳ね上がった。

私が興味を抱いたのは「人々はこの選択に対していかなる戦略を採用するのか」、そして「どちらの株が良い方かに、いつ気づくのか」（最適な投資戦略に従えば、途中損をしても総体的には儲け額が最高になる良い株の方をすぐに選ぶはずだが）。

結果は私の予想を完全に覆すものだった。人々は繰り返し繰り返し、目の前の事象に自分がコントロールを及ぼしている度合いを過大評価したのである。賢い人たちが、多くのことで人より秀でていた人たちが、もっと理解できてもよさそうな人たちが……。投資の分割方法を早まって判断してしまっただけでなく、非常に限られた情報だけでどちらの株が「良い」かを判断して、それに固執してしまった。たとえ、お金が失われ続けていたとしても、である。運よりも自身のスキルを過大評価して、環境が伝えようとしている情報に目もくれず、酷い判断をするようになっていった。

参加者たちが勝てる方の株にきり替える頻度は次第に減っていき、負ける方で倍額を張ったり、全てを債券に寄せたりした。彼らは、自分たちが正しく理解していると思い込んでいるため、それに反する示唆を全て無視しだしたのである。

実際の株式市場で不可避的に起こることだが、特に、勝っている人が負け出すとき、もしくはその逆のときにその傾向は顕著に現れる。言い換えると、“コントロールへの幻想を抱くことで、本来のゲーム

をコントロールする力が抑え込まれてしまった”のだ。そして次第に、彼らの判断力は低下していった。

過去に上手くいったこと、もしくは上手くいくと判断したことに固執した彼らは、状況が変化したあとでは過去に成功した戦略がもはや通用しないと気づけなかったのである。周りの世界が伝えてくれているメッセージにも、自分たちの求める内容と異なっていれば耳を傾けない。環境の支配者でい続けたがったのだ。環境が大きく変化したとき——過去の産物は全く役に立たなかった。これは残酷な真実を突きつけている。

私たち人間は、自分が手綱を握っていると勘違いしてしまいがちだが、実際は偶然のルールに従って動かされているだけなのだ。

私も例外ではない。しかし、この問題に解決策などあるのだろうか。理論的な知識を活用してより良い選択を行うには、実際どうすればよいのだろうか。

それは、ある1つの原因ゆえに難問だ。運とスキルの方程式はつまるところ、確率論だからだ。そして私たちの神経回路はその根本的欠点として、確率を認識するのが苦手である。統計の概念は、全くもって反直感的だ。そもそも人間の脳は、確率固有の不確かさを理解できるようには進化しなかった。初期の人類が置かれた環境には数字も計算もなかった。そこにあったのは個人的体験と言えのみだ。

人類は抽象的な状態で提示される情報を扱うようには訓練されていない。例えば「虎はこの地域では非常に稀であり、遭遇する確率は2%で、攻撃される確率はさらに低い」といったようには。代わりに人は「昨夜ここに虎が現れて、非常に怖かった」といった動物的な感情を扱うように育てられている。

何千年経っても、その欠陥は克服されていない。それは「記述体験ギャップ」と呼ばれ、あらゆる研究結果が人間が数字的なルールを習得できないことを示している。人は示されたデータよりも、「勘」や

「直感」、「しっくりくる」といったものに頼って判断をしてしまうのだ。

この世界を確率の視点で見るとには訓練が必要だが、訓練したとて、自身の体験を優先して数字を無視してしまいがちなのだ。

今日、多くの人を悩ませている災害予防のケースで考えてみよう。地球温暖化に伴って発生頻度が上がり続けているハリケーンや洪水、地震といった災害への備えはできているだろうか。核戦争やテロはどうか。これらは、心配不要と言えるだろうか。その答えを導き出すための統計情報はある。例えば自分の家に特別な保険が必要か、もしくはそもそも特定の地域で不動産を購入すべきか、といった問いの答えが。はたまたテロの被害者になるリスクが浴室で滑って死亡したり重症化するリスクと比べて、どれくらいかを示す確率のデータがある。

しかし心理学者が繰り返し思い知らされるのはこうだ——どんなにデータを見せようが、人のリスクに対する考えも、それによる判断も変えることはできない。ならば人は、どんなときに考えを変えるのか？ それはその出来事を自分で体験したときか、知人が体験したのを知ったときだ。

例えばハリケーン・サンディ（編註 2012年に発生した大型ハリケーン。ニューヨークでは広範囲で浸水の被害や停電に見舞われた）が襲ったときにニューヨークにいあわせた人は、洪水の保険に加入する可能性が高い。しかし、そこにいあわせなければ、マリブのビーチサイドの不動産に投資するかもしれない。たとえ数字上でそのビーチが間もなく消え去り、その場合には家がなくなることを示していたとしても。また、9・11を体験した人々は、テロに対する恐怖が大きく膨れ上がっているだろう。

いずれのケースでも人々の反応は統計に沿っていない。ニューヨークの全ての家で洪水保険が必要なわけではない——過酷な体験が原因で必要以上の出費をしてしまったのだ。ビーチ沿いの土地は長期的投

資対象として全く相応しくない——その統計上の被害を個人的に受けたことがないため保険額を低く見積もってしまうのだ。人が浴室で滑る確率はテロの被害に遭うよりも格段に高い、と説得してしてほしい。特にその相手が知人をツインタワーで亡くしていた場合に。

私たちの経験は全てに勝ってしまうが、何よりもその経験自体がとてつもなく歪んでいる。経験は何かを教えてくれるが、“良く”は教えてくれない。日々の判断において偶然とスキルを切り離すのが非常に難しいのはそのためだ。それは統計学的事業であり、私たちは普段、それを扱う道具を携えていない。だからこそ私はポーカーに注目した。正しく使えば、経験は確率的なシナリオを理解するための強力な武器となる。

経験を1回限りの、偶然の出来事にとらえてはならない。経験は体系的な学習プロセスでなければならない。それはまさに、ポーカーテーブルで直面する環境に似ている。その学習プロセスが正しければ、数字を詰め込んだり理論を学んだりするよりもずっと効果的に、あらゆる要素の中から偶然だけを取り出して解明することができるはずだ。

学界から離れて数年後、スキル対偶然の問題は、より個人的に差し迫ったものとなった。2015年は、我がコニコヴァ家にとって良い年とは言えなかった。1月の最初の週、私の母——あらゆる点で私のロールモデルだった——が、20年近く勤務した会社の突然の買収による規模縮小で、職を失った。同僚は泣き、上司も悲しんでくれて、母の再雇用を嘆願してくれた。母はコンピュータのプログラマーで、とても優秀だったため、私は母がすぐに新しい職場を見つけるだろうと踏んでいたのだが、シリコンバレーの現実は厳しかった。年齢の壁はいまだ根強く健在だ。特に女性にとっては。

母は50代で、若い世代と張り合うには歳を取りすぎている一方で、引退するにはまだ早かった。1年後、母はまだ職に就いていなかった。「人生はなんて不公平なの」と、最初私はそう思ったが、そこから教

わったことがある。それは、「人生に公平さという概念などない」ということだ。運が悪かった、と受け入れるしかない。

その数カ月後、活発で健康な祖母が、夜に足を滑らせた。一人暮らし、鉄製のベッドのフレーム、リノリウムの硬い床。目撃した人は誰もいない。翌日、点いているはずのない電灯を怪しんだ近所の人に発見されたが、2日後に亡くなった。さよならも言えなかった。最後の会話は覚えていないが、いつもと同じセリフを、いつもと同じ発音で言っていたに違いない。

お互い近況は何も報告できなかった。たしか祖母は、私の新刊がいつ出るのかを聞いたのだと思う。祖母に読んでもらうためにはロシア語翻訳を待たなければならないのだが、手に取るのを待てないのだ。毎回、読み通りにその質問が飛んでくる。話す度に聞いてくるため、毎回きつく返してしまう。「もう聞かないで。後で教えるから」。私がイライラして答えると、祖母は声を上げて「もうあなたには2度と何も質問しないわ」と告げるのだ。

もっと優しくすればよかった。しかしそれは後の祭り。最後まで、祖母はボイスメールを短く「おばあちゃんよ」と締めくくった。人違いを防ぐかのように。そして最後まで、私はすぐには折り返さなかった。第二次世界大戦を経験し、スターリン時代からフルシチョフ、ゴルバチョフまで生き延びた祖母は、滑りやすい床と一歩の踏み間違いに倒れた。不公平、いや不運だ。あのときしっかり足を踏んばれていれば、今も健在のはずだったのに。

次には、夫が職を失った。彼が参加するスタートアップ企業が計画した事業が、失敗したのである。私は数年振りにフリーランスライターとして、家族を養う立場に追い込まれてしまった。さらに、私たちはウェストビレッジの綺麗なアパートを引き払った。

習慣も変え、適応するために最善を尽くした。しかし今度は私が健康を害してしまったのである。私は最近まで奇妙な自己免疫の症状を

患っていた。それが何の病気か誰も分からなかったが、私のホルモンレベルは異常値を示し、あらゆるものにアレルギーを起こし、時にはアパートから外に出られないこともあった。冬の寒空の中、肌には何か触れば蕁麻疹が出る。古くてゆるゆるのTシャツを着た私は縮こまった姿勢でラップトップを抱えながら、物事が好転することを願った。何人もの専門家を訪ね、いくつものステロイド療法を試したが、言われることは一緒。原因不明。「自分には分からない」という意味の医者用語である。そのイディオパシー（白痴を意味するイディオシーが語源）は高額だった。

不公平だ。不運だ。でも本当にそうだろうか？ 何年も前に母の言いつけを聞かずに部屋を抜け出してバルコニーで遊んでいた自分のせいかもしれない。私はロシアで生まれ、チェルノブイリ後もそこに住んでいたのだ。家にいなさいと母が説教したのにはちゃんと理由があったのだ。2才の私が悪かったのかもしれない。私は家でジェームズ・ソルターを読んでいた——「この病気は想像することはできない。それはイディオパシクと呼ばれ、自然発生的なものとして知られているが、我々は本能的に分かっている、それだけではないはずだと。それは何か目に見えない弱さを搾取しているのだ。それがランダムに発生すると考えるのは不可能だ。そんな考えにはとても耐えられない」——私は思わず大きく頷いた。それが純然たる運であってもそうでなくても、ひどすぎた。

ありふれた思考パターンだ。運は私たちの周りのどこにでもいる。職場まで歩いて無事にたどり着く、といった平凡なものから極端な、例えば戦争やテロで数センチ先の人たちが不運にも犠牲になりながら自分だけ生き残る、といったものまで。しかし私たちは物事が悪い方に流れたときにしか、それに気づかない。運が私たちを他から守っているときに、その役割について問うたりはしない。運が味方しているときには気づかない、目に見えないのだ。だがいざ運が私たちに牙を

剥いたとき、その力に気づかされる。私たちは途端に、なぜ、とか、どうして、とか考え出すのだ。

純粋な数字に安堵する人もいる。それは本当の意味で純粋な、高校の数学で習う、確率だ。20世紀の統計学者であり遺伝学者であるサー・ロナルド・エイルマー・フィッシャーは、1966年にこのような指摘をしている。「100万分の1の確率は、それ未満でも以上でもない疑いなき正確な頻度で発生する。それが『自分に』発生したことに驚いたとしても、だ」

世界人口の75億人に当てはめてみれば、この到底起こり得なようなことが、一定の頻度で発生することが確実に分かるだろう。「100万分の1の確率」は1秒に1回発生するのだ。身近な誰かがとんでもない事故で死ぬ、誰かが職を失う、誰かが謎の病気に罹る、誰かがくじを当てる。それは確率であり純粋な統計学であり、人生の一部なのだ。そこに良いも悪いもない。もし奇妙な偶然や、1度限りの出来事が発生しなかったとしたら、それこそが驚くべきことなのだ。

確率に感情の概念を持ち込む人がある。するとそれは運に変わる。確率が突如、正か負か、幸か不幸かといったプラスやマイナスの数値を帯びるのだ。幸運か不運か。ラッキーかアンラッキーか。その運に意味や方向や意思を授ける人もある。するとそれは運命やカルマ、宿命に変わる。計画的な確率に。なるべくしてなった。さらに深入りする人もいる、運命予定説だ。常になるべくしてなっており、一切のコントロールや自由意志の感覚は幻想だ。

ポーカーはこういった話に、果たしてどう関係するのだろうか。

この冒険を始める前、私は人生でポーカーをしたことがなく、実際のゲームを見たことすらなかった。ポーカーは私にとって取るに足らない存在だったのだ。しかしあらゆる出来事が悪い方に転がり出したとき、私は、何かを理解したいと思うと決まってやることに立ち返っ

た。読書だ。眼前の出来事に灯りを照らしてくれそうな本、自分がコントロールできていると再び思い込ませてくれそうな本。狂ったように読みあさっていた中で、ジョン・フォン・ノイマンの『ゲームの理論と経済行動』（筑摩書房）に出合った。

フォン・ノイマンは20世紀の偉大な数学家であり統計学者だ。今日私たちが常に持ち歩いているあの小さなもの、コンピュータを発明し（当時はそんなに小さくはなかったが）、水素爆弾の基礎となった技術を作り上げ、さらにゲーム理論の父としても有名である。同書は基礎的な内容だが、私はその中であることを学んだ。理論の全てがたった1つのゲームから着想を得ていること——ポーカーだ。「実際の人生は、ブラフや人を騙す技、相手が自分が何をしようかという自問で構成されている」とフォン・ノイマンは著した。「私の理論ではそれこそがゲームの本質である」と。

フォン・ノイマンは他のカードゲームには目もくれなかった。それらの退屈なゲームに手を出す人は人生を無駄にしており、純粋な偶然性の中から攻略法を生み出そうとしている、と考えていたほどだ。実際は不可能なのに。純粋な運のゲームだけでなく、真逆のゲームも彼にとっては同罪だった。チェスのように理論上全ての情報が収集可能で、数学的に全ての動きを事前に計算することが可能なゲームだ。

彼のゲーム嫌いのたった1つの例外。それがポーカーである。彼はポーカーを愛した。彼にとってポーカーは、人生を支配しているスキルと運の神聖なバランスを象徴していた。ゲームのやりがいとなるスキル要素が十分にある一方で、勝負を挑戦的にする運の要素も十分だった。プレイヤーとしての腕前はあらゆる面で酷いものだったが、それでも彼はのめり込み続けた。彼にとってポーカーは究極のパズルだったのである。

彼はポーカーを理解し、その正体を明かし、最後にはそれに勝利したいと思った。もし運とスキルを切り離し、後者の役割を最大化しな

がら前者の役割を最小化する術を見つけられたなら、人生における重大な決断が必要な局面で、その解決方法を握れるはずだと信じていたのである。

それはポーカーが、人生を映し出しているからである。純粋な偶然任せのルーレット型でも、数学的洗練さと完全な情報を備えたチェス型でもない。私たちが暮らすこの世界と同様に、その2つの要素が複雑に絡み合っていて同居しているのがポーカーなのだ。相反する2つの力——偶然とコントロール——のバランスを保つ支点到にポーカーは位置している。誰もが1つのハンド、1つのゲーム、そして1つのトーナメントで幸運にまたは不運に見舞われ得る。1枚のカードで世界の頂点に達することもあれば、1枚で追放されることもある。時に自分のスキルや訓練、準備、才能は一切関係なく。ただし最終的に見れば、運が味方についたり敵に回るのは短期的な話だ。長期的な時間軸では、スキルがその輝きを放つのは明白である。

ポーカーは数学的基礎の上でありながら、人間の意図や相互作用、心理学——ニュアンス、騙し合い、ちょっとした仕掛け——といった他人より優位に立つヒントを得る要素を備えている。人間は合理的ではなく、情報は全ての人に開かれているわけではない。その行動には「ルール」などなく、規範や示唆があるだけだ。そして一定の幅広い制約の下で、誰もがいつでもその規範を破り得る。

フォン・ノイマンを魅了したのは、人生と同様に綺麗に分布図を描くことが不可能なゲームであるという点だ。リアルな世界は、けっして完全などではない情報から最善の決断を下すことに根差している。他人の思考を知ることができないのと同じで、ポーカーでは自分以外のプレイヤーのハンドは知ることができない。数学的に最適な判断を基準として物事を型にはめていくだけが、人生ではない。人の隠された部分や人間らしさを見分けなければならない。人生とは「どんなにきちんとした型を用意しても、人間本来の気まぐれさや予測不能さを

そこに収めることなどできない」と学ぶ場なのである。

フォン・ノイマンの書籍で、彼が世界で最も重要な戦略的判断——彼は何と米国陸軍のコンサルタントも務めた——の探究のために他を差し置いてポーカーを選択した論理的根拠に触れたとき、私の中で何が繋がった。ポーカーは、私の研究方法や勉強を通してだが、理論的ではなかった。ポーカーは実践的であり、実験的だった。ポーカーは、人間の学習教材のお手本であり、単発的な勝負事ではなく、体系的なプロセスなのだ。言い換えれば、ポーカーは私がやろうとしていることにうってつけだった。

単にポーカーと表現しているが、スタッド、オマハ、ラズ、バゲージやHORSEといった様々な種類がある。それぞれに独自のルールが存在するが、どのスタイルのポーカーでも基本的なパラメータは一緒だ。コミュニティカードと呼ばれる何枚かのカードは表向きに誰にでも見えるように配られ、何枚かは裏向きに本人しか見えないように配られる。自分のカードの強さと、相手のカードがどれだけ強いかの推測に基づいて賭けをする。確実に分かるのは自分のカードだけ。つまり、非完全情報ゲームである。限られた情報を基にして、最善の判断をしなければならない。そして最後まで残ったただ1人が、それまでに賭けられた金額の総額、いわゆる「ポット」を手に入れることができるのだ。

中でも私が追求すると決めたゲームは、たまたま一番人気だったノーリミット・テキサスホールデムである。このゲームが他の種類のポーカーと違う点は2つ。1つ目は、共通の情報と本人だけが持つ情報の量が絶妙なバランスである点だ。簡単にゲームの流れを説明すると、各プレイヤーには最初に2枚のカードが裏向きに配られる。これが「ホールカード」、手札である。対戦相手がどんな手札を持っているかは、プレイヤーの行動から推測はできても、確実に知ることはできない。得られる情報は、コミュニティカードと相手のベットのパター

んだ。ホールデムでは、コミュニティカードは三段階で配られる。最初に3枚、「フロップ」が配られ、ベットが一巡するとさらに1枚「ターン」が、さらにもう一巡して5枚目の「リバー」が配られる。つまり、手元にある自分しか知らない2枚のカードと全員が知っている5枚のカードをもとにして、4回の「ストリート」と呼ばれるベットのラウンドで判断を下していく。この各ストリートで、対戦相手の見えないカードが自分のカードに比べて強いのか弱いのかを見極めることになる。

未知の変数が多すぎてスキルの要素が少ない種類のポーカーもあれば（例えば各プレイヤーに裏向きでカードを5枚配るゲームもある）、未知の情報が少なすぎて推測の要素が多すぎるゲームもある中で、テキサスホールデムはスキルと運のバランスが比較的上手く取れている。2枚のホールカードはまさに実践的な割合だ。未知の量がこのゲームを人生のシミュレーションたらしめるのに十分だし、一か八かの博打になるほどには多くない。

もう1つこのプレイスタイルを際立てているのは“ノーリミット”のコンセプト——フォン・ノイマンが好んだスタイル——だ。「リミットのゲームでは純然なブラフの力が弱まる」と、1972年に第3回のWSOPタイトルを手にした当代最高峰プレイヤー、アマリージョ・スリムは解説する。リミットがある場合、ベット額に上限が設けられる。上限額はハウスルールで設定されることもあり、それを超すことができない任意の金額を主催側が決めるのだ。また、「ポットリミット」と呼ばれるゲームでは、上限額はプレイ中の額によって決められる。ベット額はポットの金額を上回ることができない。いずれにしろ、アクションの範囲は制限されることになる。

一方ノーリミットでは持ち金をいつでも、いくらでも賭けることが可能だ。手持ちのチップを全てポットに入れる、全賭けができるのだ。そしてこの瞬間こそが、このゲームの醍醐味だ。「リミットは“ノミ

の心臓の持ち主か經理で生計を立てたい人”向けだ」とスリムは言う。

「もし相手に対して『オールインムーブ』ができない、つまり目の前の有り金を全て賭けられないのなら、それは本物のポーカーではない」

これこそが、ノーリミットのポーカーが日々の意思決定の強力なメタファーとなる所以だ。人生には限界などないのだから。いかなる意思決定の局面でも、全賭けを阻害する外的制約は存在しない。いついかなる場合においても、あなたの全財産、信頼、心、そして人生そのものさえも賭けることを止めるものなどあるだろうか？ 何もない。そして、そこにルールなどない。あるのは、あなた自身が導き出す内々の計算式だけだ。

あなたの周りの全ての人間も、そのことを「彼ら自身の」判断材料として知っておく必要がある。行くところまで行くというあなたの覚悟を知ったうえで、彼ら自身はどこまで投資すべきか？ これは、ゲーム理論のもう1人の巨人、ノーベル賞経済学者のトーマス・シェリングによって世に広められた終わりのない瀬戸際政策のゲームで、私たちの人生のあらゆる局面で展開されている。

恋愛において誰が最初に「愛してる」と言って「オールイン」するか——それを言うのが自分の方だとしたら、結果フラれてしまうだろうか？ ビジネスの交渉から手を引くのは誰か？ 戦争を始めるのは？ オールインの選択肢——そして周りの全ての人もオールインの選択肢を持っているとの認識——それは、あらゆる判断を極めて困難にする致命的な変数なのだ。

そしてもちろん、感情的な要素も考えなければならない。ポーカーテーブルだろうがリアルな世界だろうが、オールインのリスクに匹敵するものはない。最高の結果として「ダブルスルー」、つまりその場で獲得し得る最高額を手にしてスタックを倍にすることもあるが、同時にゲーム終了の可能性もある。人生最大の取引成立で出世、生涯のパートナー獲得か、はたまた倒産や精神的などん底か。人生と同じで

ノーリミットポーカーはハイリスク・ハイリターンだ。WSOPのチャンピオンがノーリミット・テキサスホールデム方式で決まるのは偶然などではない。私が習得対象に選んだプレイスタイルがノーリミットだったのも、これまた偶然ではない。最高の判断を追求するのなら、最高の代理人を選ぶべきだ。

いざゲームスタイルを選んだなら、決めるべきことがもう1つある。キャッシュか、それともトーナメントか。キャッシュゲームでは、チップはキャッシュ、つまり現金と等価値を持つ。例えば\$100のゲームで参加したら、それと同額のチップが目の前に置かれる。いつでも必要な額を現金で支払えば、自分のスタックに追加できる。そして、いつでも席を立てば終了することができる。

バストして賭け金がなくなっても、いつでも買い直して再挑戦できる。さらに、賭けの仕組みは常に変わらない。\$1/\$2のゲームにバイイン（カードを見る前にポットに入れなければならない「ブラインド」と呼ばれる強制ベットがスモールブラインドで1ドル、ビッグブラインドで2ドルということ）した場合、その後もずっと\$1/\$2のゲームのままだ。振り返ったら急にビッグブラインドで5ドル払わされていた、なんてことにはならない。

トーナメントでは、チップの価値は他プレイヤーとの相対でしかない。つまり、スコアを付けるための手段に過ぎないのだ。\$100のバイインで10,000のチップをもらうこともあれば200のときもあるが、それはどうでもいい。全員のチップは同額で、できるだけ多くのチップを集めることがゴールであり、全てのチップを手に入れた者が優勝する。負けが込んでも、残念ながら誰かを呼んでもう\$100払ってチップを追加することはできない。バストした時点で、退場になる。

トーナメントでの生き残りを懸けて戦うのだ。ブラインドは、予め決められたスケジュールで上昇する。例えば\$1/\$2で始まったとしても、30分や45分後などその仕組み次第だが、それが\$2/\$4になり

\$4/\$8になり、と上がっていく。自分のチップ数は突然当初ほどの価値を持たなくなり、ポットを勝ち取りに行くプレッシャーが掛かってくる。なぜならそうしないと「ブラインドアウト」といわれる、強制ベットの支払いでチップを使い果たす状態になり、手持ちが0になってしまうからだ。

この2種類の仕組みは、それぞれが大きく異なる力学を生み出している。キャッシュゲームは『戦争と平和』だ。やっと1000ページ読み進んでも、最初の戦闘がどう決着するのか見当も付かない。飛ばし読みをしようものなら、飛んだ先でお構いなしに新しい事件が発生する。トーナメントの性質はもっとシェイクスピア寄りだ。まだ第三幕が始まったばかりなのに、出演者の半分がすでに死んでいる。もし人生をワープを使って俯瞰したいのなら、トーナメントポーカーがうってつけだ。だから私もそうすることにした。

フォン・ノイマンに啓示を受けてからの数カ月間、ポーカーの書籍を読みあさった。さらに、トッププロたちのプレイを動画で見たりコメントを聞いているうちに考えるようになったことがある。それは、日常生活の泥沼の中で運をスキルから切り分けられない、あまりに人間らしい自分の無力さを「ポーカーを通して克服し、その切り分け方を習得できたなら」と。

夫が次のキャリアの動きとして、今すぐ始めるべきかそれとも完璧なカードが来るまで待つべきなのか。その判断の役にポーカーは立てるだろうか？ 私はこのまま医者にかかり続けるべきか、また目の前の請求書の山を前に、家計をどう立て直すべきか。その思考過程にポーカーは貢献できるだろうか？ 母の不利な状況を好転させる手助けにポーカーはなれるだろうか？ 私の今後のキャリアにおいて勝ちを最大化させ負けを最小化させられるよう、その計画の一助にポーカーはなるだろうか？ 私は、自分の切り札を試してみることにした。

話をエリック・サイデルとの出会いに戻そう。エリックのポーカーに対する取り組みは、私のそれとは雲泥の差がある。彼は30年以上に渡り、ポーカー界を引っ張ってきた。8つのWSOPブレスレット保有者にして（このトーナメント史上で彼を超すのは5人だけ）、WPT優勝者だ。存命では32人しかいない、ポーカーの殿堂入りメンバーでもある。トーナメントでの通算獲得賞金額は歴代4位であり（長らく1位だった）、WSOPでの入賞回数も4位（114回）。そのキャリアの中で彼は、15週間もグローバルポーカーインデックスの第1位に君臨しており、彼こそがGOAT、歴代最高（Greatest Of All Time）だと多くの人が認めている。

まさに一流のポーカープレイヤーが、それもプロ中のプロが、そこら辺のジャーナリストに幼児のように付き纏われて、世界の仕組みについての超基礎的な質問に答える道理が、どこにあるというのだろうか。名声に関心がない彼には、ジャーナリストなどという切り札は通用しない。そもそも自分の戦略を人に教えたいなどと思っていない。まして彼は無口で有名なのだ。

「まさか僕がその本に登場するわけじゃ“ない”よね？」ウェストビレッジのビストロで、エリックが私の提案に対して質問した。彼はベンチ側に移りさらに少し前屈みになった。自分の存在感を少しでも消そうとするかのように。

「えーと……」。これは予想外の展開だった。

「何にしろ引き受けられるかは分からないな。今まで誰にも教えたことがないのは知っているよね？ それに僕の旅のスケジュールが…」私は彼を遮った。早くも暗雲が垂れ込めている。

「確かに私はデッキに何枚のカードがあるか知りませんが…」

「ちょっと待って、本当？」今度は彼が遮った。眉が吊り上がっている。少なくとも彼を驚かせることには成功したようだ。

「本当です。私はいわゆる典型的な生徒ではないんです」

代わりに、と私は続けた。バックグラウンドがある。

「私は心理学で博士号を取得しています。人の意思決定について研究しました。人が日々行う判断について、しかも理論的視点で」

「心理学者か。なるほどそれは面白い。ポーカーにとっても役に立つかもね」。彼はテーブルに乗り出した。細いひじが卵白のオムレツにぶつかりそうだ。

「君はおそらく一番価値が高い領域からアプローチしている。特に差別化の意味だね。他の連中は皆、とにかく数学ありき、データありきだ。その領域はまだ開拓の余地が大きい。実際、一流プレイヤーの中でもカモにできる連中がいるが、それは数学にのめり込んでいる連中なんだ」

「それはよかった」。出だしはひどかったが、何とか琴線に触れることができたようだ。そして、「高校以来、数学は一切やってません」と私は告白した。

「僕の数学のスキルも大したことがないし、それはそんなに珍しくもない」とエリックが慰めてくれた。「無害だが、上達の足かせでもない。必要な数学の基礎は本当に基礎レベルだから6歳児でも大丈夫だ」

安心した。しかし、私が彼に普段は指で数えてますと伝えた場面は、割愛しようと思う。

「全てはよく考えること。本当の質問は、考え抜いて必死に努力したらその域に達することができるか？ということだ。僕はできると思う」とエリックは言った。ある意味…、と彼は続けた。私が部外者なのは好都合だ。私には真新しい目で物事を見渡すことができ、そして普通のプレイヤーが持っていないようなスキルがすでにある。私には「レンジ」とは何か、またなぜそれが二極化や合併ボラライズされているとよいかを理解する狭い専門性はないが、どのように学び、どのように考え、人がどのように動くかを理解する広い専門性がある。

デイビッド・エプスタインは、著書『RANGE(レンジ) 知識の「幅」が最強の武器になる』(日経BP)で部外者の性質について触れている。「切り替える者は勝利者である」と彼は書いている。スイッチャーとして、おそらく私なら内部者の近視眼的な視点を超えて、心理学者のジョナサン・バロンが「アクティブなオープンマインド」と呼ぶものをもたらせるかもしれない。全ての経験が平等に作られるわけではもちろんないが、私の経験はここでは特に役に立ちそうだ。

「何か国語を話せるの？」私の言語能力に特に興味を持ったようだ。

「完璧に話せるのは、英語とロシア語の2つだけです。でも昔はフランス語とスペイン語が話せて、イタリア語も結構喋れます。ペルシャ語も習っていましたが、すっかり忘れてしまいました」

「それはとても役に立つと思うよ。フィル・アイビーを知っているかい？」

私は頷いた。私が知っている数少ないポーカープレイヤーの1人だ。

「一時彼は、数ある種類のポーカーゲームの全てにおいて最高のプレイヤーだと言われていたんだ」と彼は説明する。ゲームの種類の習得は、異なる言語の習得に似ている。「僕がさらに感銘を受けたのは、彼の妹が言語学者だということだ。15カ国語とかを話せるらしい」

すごい。私の能力が霞んで見える。

「そういった頭脳や関心を持った人がどれだけいると思う？」エリックは続ける。「フィルと妹は言語を信じられないやり方で習得する機能を備えているようなんだ。君も明らかに、言語を素早く習得したり異言語に適応する能力を持っているようだが、良いことだ。ポーカーに必要な資質と一緒だからね」

確かに一理ある。ポーカーは、多くの側面で言語学習に似ている。新しい文法があり、新しい用語があり、新しい実世界との関わり方がある。しかし私には大きな違いが1つ見える。人間には生まれつき言語習得能力が備え付けられている。その程度は確かに人によって差が

あるが、人は母国語を大した努力をせずとも習得する。脳にはロードマップが標準装備されていて、きちんと教わらずとも音から意味を導き出したりルールを汲み取ることができるらしい。だが、ポーカーは違う。どんなに心理学的にプレイしようとしても、このゲームの本質は統計学だ。オッズや、自分のハンドの強さ、それが相手と比較してどれだけ強いのか、さらに強くなる可能性はどれほどか、等。これら全てに統計学的な計算が必要だ。その上でどれだけ上手くいくかは、別の話だ。

「心理戦こそがポーカーの一番魅力的なところなんだ」とエリックが、私の思考プロセスを遮って言う。「意思決定のどんな分野を研究したんだい？ カーネマンとか？」

「卒業前に師事したのはウォルター・ミシエル先生。マシュマロ博士はご存じですか？」

「ワオ！ それはすごい。自制心はポーカーで肝だからね」

エリックはマシュマロ博士のことまで知っていた。私の人選は正しかったようだ。

「私もそう思いました。確かに私はポーカーをやったことはありません。でもこれは言えます。他のどのポーカープレイヤーよりも、この分野の勉強をしたと賭けてもいい。私はストレスと意思決定の研究をしました。感情的なものも時間のプレッシャー的なものも、関係がありそうなもの全て。それに、それに…」調子が乗り出したのでここで彼に遮られたくなかった。弟子にすると認めさせねば。「私が見つけたこの論文を読んでみてください」。私は最後の切り札を出した。それはポーカーでの癖^{テル}について私が突き詰めた論文で、私が知る限り学界の外で発表されていない。そしてまさにWSOPのファイナルテーブルでの分析がベースになっている。本物の分析だ。

エリックは注意深く読んでいた。完全に集中して。そして不意に笑い出した。

「ワオ。オッケー。これは誰にも見せちゃダメだ」

誰にも見せないかと約束した。それと引き換えに、パートナーシップが成立した。

こうして私は貴重な機会を手に入れた。全く新しいスキルを習得するチャンス、新米として一からやり直すチャンス。それも世界最高の専門家が手引きしてくれるだけでなく、ポーカーという、スキルと運が連続体として最適バランスを保っている、人生の生き写しのような領域で。

エリック・サイデルにとって、私の1試合1試合での勝ち負けなど、実際どうでもよいことだ。彼が知りたいのは、私たちがどこまでたどり着けるか。つまり心理学や人間観察、感情の読み取りで私がどこまで行けるかだ。ゼロからスタートした人が、人間心理の深い理解を武器に、ポーカーテーブルの数学や統計学の天才たちを打ち負かすことができるのか？ ある意味これは、人生哲学の最高の実験といえる。

物事の定性的な側面対定量的な側面。人間対アルゴリズム。この国で起こっているパラダイムシフトの中心にある力学、その一端に私はこれから身を置くことになる。そして究極の試験はワールドシリーズのメインイベントだ。このトーナメントは、いまだ女性チャンピオンの誕生を見ていない。過去にファイナルテーブルに残った女性は1人だけだ。エリックが私を訓練するのはポーカーのハウツーを教えるためではない。勝つためだ。それほどまでに、彼はこのやり方できっと成功できると信じているのだ。そして私も、この冒険が有意義になるよう、やれることをやり尽くす覚悟だ。

私にとって、これはもはや哲学的な実験「だけ」ではない。もちろんそれが核ではあるのだが、個人的な部分もある。エリックの期待を裏切りたくない。彼の信念は、私の能力と彼自身のアプローチに対する自信から来る部分もあるが、無限の寛大さの表れでもある。友人を

信頼し尊敬する人に対してこれだけ身を捧げる人に、私は長い間出会ったことがない。彼は自分の時間を割くだけでなく、自分の信頼、エネルギー、心、評判といったものを私に預けてくれるのだ。今考えられことは1つだけ。

「絶対に、しくじるわけにはいかない」

当初は1年のはずだったが、結果としてそれは私に新しい人生をもたらした。初心者から、私はチャンピオンに上り詰めたのだ。アマチュアから、プロに。そして何よりその過程で私の人生が好転していくのを、驚きと誇らしさが入り混じった感情で見つめてきた。

本書はその冒険の物語だ。プレイの仕方や勝ち方、上達法といった、ゲームとしての深みを極めた攻略本ではない。その分野は、私よりはるかに偉大な専門家たちの書籍で詳しく解説されている。本書は言うなれば、フォン・ノイマンの挑戦の後追いだ。

人生で下さなければならない最も難しく重要な決断を見つめるレンズとしてのポーカー、そして人生における運とスキルの探究、さらに私たちの潜在能力を最大限発揮して、人生の操縦法と最適化の手段を学ぶ試みである。

本書を通して読者の皆さんには以下のことをお伝えできればと思う。それはポーカーからかけ離れた状況での意思決定の示唆であり、カジノで私が学んだことを日常の中で下す様々な判断や、私がたまに行う、重要で意味のある意思決定にどう生かしているかの紹介だ。

ポーカーはあらゆることに適用と応用が可能で、その対象は感情の抑制から人の思考の読解、損失のカットと利益の最大化、そして自分を最高の状態に追い込むことで、他人のブラフを見抜くだけでなく自分自身をまんまとブラフできるようになる心構えまで、多岐に渡る。ポーカーにおける運とスキルの混在は、それらが同じように混在している私たちの日常生活の鏡写しであり、またその条件下で人よりも優

位にプレイするための学びの機会でもある。ポーカーは、自分がいつどのようにコントロール権を得られるか。そして同時に、純粋な運の要素にどう対処すべきかを教えてくれる。それも、私がこれまで遭遇してきたどんな環境よりも、明確に。

何よりも、誘惑が偏在するこの現代において、何かを成し遂げ成功させるために注意深い観察と心の平静がどれほど重要かを、ポーカーは気づかせてくれる。物事に熱中したり、新しいことを学ぶのが、本当にどれだけ大事かも。それはエリックが初日にレッスン1として私に教えてくれたことだ——注意を払いなさい。

本書ではポーカーをどうプレイするかではなく、世界をどうプレイするかを紐解いていきたい。

ギャンブラーの誕生

2016年秋、ボストン

「運のゲームが非道徳的だとするならば、全ての人間の営みもまた非道徳的である。人の営みで、運に頼らないものなど一つもないからだ。利益が得られる機会に対して損失のリスクがない場合においてもである」

——トーマス・ジェファソン『Thoughts on Lotteries
(くじに対する考え)』(1826)

「あなた、ギャンブラーになるの？」

私の祖母、ババ・アニヤのセリフだ。もう1人の祖母であり、私にとって唯一存命の祖父母だ。家族に会いにボストンにやって来た私は、新しいプロジェクトを嬉々として語ったのだが、祖母は快く思っていないようだ。乗り気じゃない、という表現はこの場の彼女には相応しくない。祖母は顎をまるで石を切り裂くように突き出す癖がある。彫刻で馬上の征服者が見せる英雄の表情。英雄か、はたまた怒れる将軍か。祖母の失望が塊となって私の双肩にのしかかるのを感じる。

私が子供を望まないことについては、十年以上の度重なる説得でようやく（完全にではない）諦めかけてくれたが、今回のことは祖母の最低水準を下回った。150cmちょっとしかない92歳の女性の失望など、たかが知れていると思った読者は考え直してほしい。祖母は昔、ソ連時代に教師をしていた。そこらの陸軍の訓練士官よりも実践を踏んでいるのだ。

祖母は頭を振り「マーシャ」と私を呼んだ。ロシア語での私のあだ名、「マーシャ」。その言葉には、私がこれから捨て去ろうとしている

人生に対しての悲しみと後悔がたっぷりと詰め込まれていた。そのたった一言で祖母は、理解を超えるほど最悪な決断を私が下して身を滅ぼす寸前だと、伝えることに成功した。

私には、ババ・アニヤの頭の中でドストエフスキーの賭博者が、架空の街ルーレテンブルクで身を投げるシーンが再現されるのが見えた。ドストエフスキーは自身の体験をその著書に投影した。22歳の愛人ポリナ・スースロワと旅行で赴いたバーデン＝バーデンで、彼はルーレットに熱中し「全てを失った」。それでも彼は止めなかった。愛人との情事を終わらせる発端となり、2度目の結婚生活をほぼ破綻させ、また財政的な破滅を招いたにもかかわらず、ルーレットは彼を魅了して離さなかった。「私はあらゆることの底辺を見てきた」。彼は手紙の1つに書いた。「そして生涯、その底辺の下で生きてきた」

それこそが私の運命なのだと、祖母の顔には書かれている。ハーバードで学んだ挙句に本当に「これ」を選ぶのか？

「マーシャ」。祖母が繰り返す。

「あなた、“ギャンブラー”になるの？」

祖母の反応は確かに激しい。だが、孫が眼前で道を外そうとすることなどそうそうない。祖母として身を挺して止めなければならないし、それは決して異常ではない。ポーカーを教材として人々に推奨することで社会全体的な「罪の雪崩」を起こしたとして、私はこれから非難され続けるだろう。モラルを墮落させたと見知らぬ他人から言われることもあるだろう。保養施設の極めて知的な集団が、私にこう話しかけてくるかもしれない。「ポーカーをするのはあなたの勝手だけど、“嘘をつく”のを人に奨励するのはどうかと思うわ。しかも子供にさえ！」と。

ポーカーの世界は誤解がつきまとう。その筆頭が、悲嘆に暮れたババ・アニヤと同一の、ポーカーとギャンブルが同義だという考えだ。私は意気揚々と冒険の準備を進めていた。私にとって、このポーカー

の冒険に挑戦する意義は十分過ぎるほどにあった。この冒険は、とても意義深いものだ。「当然に」人々もポーカーが意思決定を学ぶ上での重要な手段と理解するものと考えていた（だってほら、フォン・ノイマンがいるでしょ！一緒にポーカーやろうよ！）。しかしババ・アニヤを見るに支援を得るための闘い、そしてポーカーと無関係な事柄に判断を下すための最高の教材の1つだと正当化するためには、まだ苦労が必要なようだ。これから何度も繰り返し説明することになるだろう。だから、しっかりと理論立てしなければいけない。

訓練を受けていない人の目にポーカーは、容易く見える。私が会う人はみな、自分の中の本があり、きっかけさえあればいつでも書き出す用意があるようだ。エリックに会う人はみな、自分が少し頑張ればポーカープロか、少なくとも凄腕のポーカープレイヤーになれると思っている。ほとんどの人が、スキル要素を過小評価しているのだ。とても単純に思っているのだろう。良いカードが来れば、がっばり稼げる。全員にブラフをかませば、またがっばり。どっちにしろがっばり稼げるというわけだ。私はエリックと話すたびに、新しい売り込みの話の聞いている気がする。彼に気づいたバーテンダーが、ウェ이터が、Uberのドライバーが、「自分もあなた以上に上手くやれる」「今までその機会が与えられなかっただけだ」と話しかけてくる。ツキがたまたま巡ってきていないが、もしエリックがああ大会の資金をバックアップしてくれれば……。

ポーカーには実際、運の要素がある。しかし、運の要素がないものなどあるだろうか。プロ契約したサッカー選手であっても来週怪我をするかもしれないし、期待に見合わなかったと1年でチームから追いつ出されるかもしれない。そんなスポーツ選手よりもポーカープロは「ギャンブラー」なのだろうか？人々は、ギャンブルだとポーカープレイヤーを批判する一方で、格段に少ない情報で行う株の仲介人を

尊敬している。ある意味、ポーカープレイヤーは他の誰よりもギャンブルを避けているとも言えるのに。

しかしこの誤解は1つの単純な理由で、一般の人々の頭に刷り込まれている。例えば囲碁やチェスと違って、ポーカーには賭けの要素がある。そして賭けには金銭が絡む。そのことが頭を過ぎると、クラブやバカラといった本当に純粋なギャンブルと一緒にたにされてしまうのだ。よって私は、最近何度も復唱し真言のようになりつつある言葉を、祖母にも伝える。ポーカーでは、最低のハンドで勝てることもあれば、最高のハンドで負けることもある。カジノにあるその他全てのゲーム、そしてチェスや囲碁などの完全情報のゲームでも、純粋に手駒が最高でなければ勝てない。それ以外に勝つ手立てはない。これが、ポーカーがギャンブルではなく鍛えあげたスキルで勝負する競技である端的な証明なのだ。

テーブルにいる2人のプレイヤーを想像してほしい。まず、カードが配られる。各プレイヤーは自分のカードを見た上で自分のカードが賭けに値するほど強いかを判断しなければならない。相手プレイヤーがプレイし続けようと思ったなら、最低でもビッグブラインドを「コール」、つまり自分の前までに賭けられた最高額と同額をポットに置かなければならない。その他の選択肢にフォールド（カードを捨ててそのハンドから降りる）かレイズ（ビッグブラインドよりも大きい額を賭ける）がある。しかし、その判断基準を誰が分かるだろう。

手札がプレミアムな組み合わせだったかもしれない。もしかしたらハンドは平凡だがそれでも勝負することに決めたのかもしれない。あまり多く勝負しない自分が相手プレイヤーから保守的に見られていると感じたために、そのイメージを逆手に取って普段よりも弱いハンドで参加したのかもしれない。それとも、単なる退屈しのぎかも。その理由は、相手のカードと一緒に、本人にしか分からないのだ。

もう1人のプレイヤーも相手の行動を観察し、それに従って反応す